

五間堀川河川災害復旧工事における松並木保全の取組

五間堀川（岩沼市）は、古くは舟運を目的に木曳堀として整備されてきました。松並木を始めとした美しい景観がありましたが、東日本大震災により運河周辺の景観が一変しました。河川災害復旧工事において、歴史ある運河にふさわしい景観の保全の取組を行っています。

五間堀川(木曳堀)



～五間堀川の歴史～

五間堀川(木曳堀)は貞山運河の一部で、阿武隈川流域の藩領南部の地方と仙台を結ぶとともに、名取谷地開発を目的として開削されたものです。伊達政宗の命により建設が始まったとされ、川村孫兵衛重吉によって慶長2年～慶長6年(1597～1601)頃までに掘られ、仙台城や城下町の建設資材運搬に役立つと言われていました。

また、木曳堀が名取谷地の排水路となったため、流域が耕地化され新田開発が促進されました。

現代では、作家司馬遼太郎が「街道を行く」の中で、貞山運河の松として、木曳堀の松並木について紹介しています。

～貞山運河をはじめとする運河群について～

貞山運河(木曳堀, 新堀, 御船入堀), 東名運河, 北上運河は、全長約49kmにわたり仙台湾沿岸を繋ぐ、日本一の運河群です。このうち、木曳堀の最南端7.5kmが五間堀川となっています。

五間堀川の松並木と地域との関わり

地域の方々から親しまれてきた松並木は「地域」によって守られてきました



寺島橋付近の松並木(被災前)

名取地区海岸林保護組合

名取市北釜から岩沼市新浜まで、枝払いや下草刈りなどの管理を数十年にわたり実施。



「貞山運河水紀行」・・・運河と親しむイベントが行われていました

東日本大震災前の松並木



東日本大震災前の松並木は運河沿いに広く存在し、貞山運河を代表するシンボルでした

東日本大震災後の被災状況



津波によって、五間堀川付近の地域に甚大な被害があったほか、松並木の多くが流失しました



松並木保全の検討

河川災害復旧事業からどれだけの松並木を残せるか

松並木保全のために以下の過程で検討を行いました

保全区間の抽出

現地踏査の実施

保全区間案の策定

地元との意見交換

保全区間の決定



【地元との意見交換】

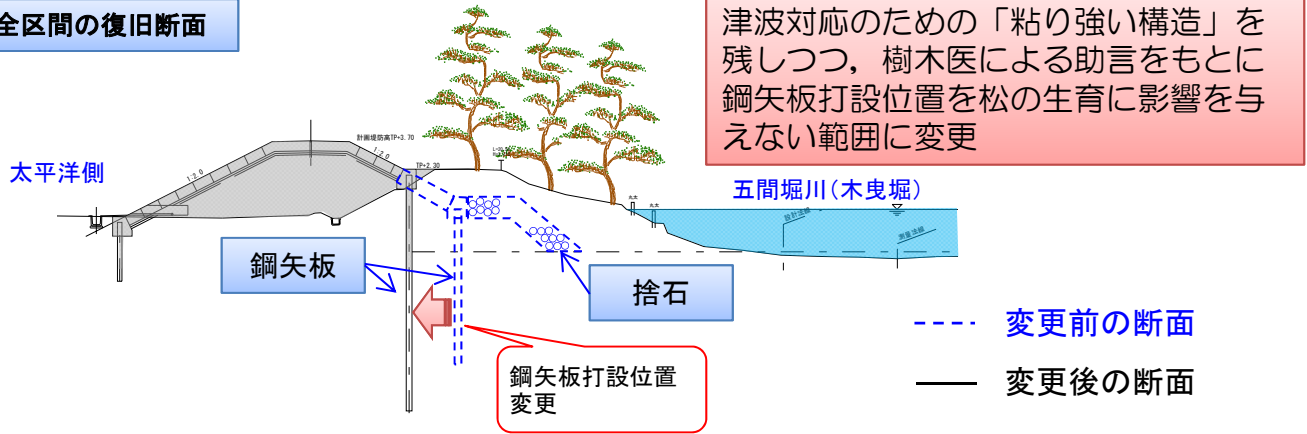


松並木を保全することができる区間（松並木保全区間）を新浜橋から上流L=1.4kmと設定することについて地元住民代表と意見交換を実施



松並木保全区間を新浜橋から上流L=1.4kmとすることで決定

保全区間の復旧断面



河川災害復旧工事において以上のような工夫を施すことにより、次のような効果が期待できます

- 保全区間一連の松並木を保全することができます
- 既に枯死した松を除去することにより、マツクイムシの被害を抑えることができます
- 震災前の景観に近い景観を残すことができます

引き続き、歴史ある貞山運河の景観に配慮した、災害復旧事業を行ってまいります

